

令和5年12月22日（金）校長あいさつ

高志高等学校
校長 山内 悟

皆さん、こんにちは。

12月22日（金）に冬休み前の全校集会を行う予定でした。その場で皆さんに話をさせてもらうつもりでしたが、大雪の影響により学校を臨時休業としましたので、ホームページ上に掲載することにします。

今日は、2つお話をさせていただきます。

まず、1つめです。

前期始業式の時に、米谷清和先生という方のお話をしたのを覚えていますか。米谷先生は1947年生まれ、高志高校の卒業生で、現在75歳くらいの方です。日本画の画家として有名な方で、東京にある多摩美術大学の名誉教授をしておられます。

今年の4月から5月にかけて、福井県立美術館において、「今を生きる、時代を描く」という展示会が行われ、米谷先生が学生時代から描き続けた作品の中から、60点近くが展示されていました。

このことに関する記事が、4月15日の福井新聞に掲載されていたので、その一部を紹介します。

ちなみに、この記事は、福井県立美術館の学芸員・佐々木美帆さんが書いたもので、佐々木さんも高志高校の卒業生です。

米谷さんは県立高志高校の出身。当時を知る人によると、部員90人の美術部を率いたカリスマ部長だったそう。技術的な勉強をさほどせずに多摩美術大学に入学したため、4、5月は若い先生から「なってない」と全否定されますが、6月に入り日本画界のスーパースター的存在の横山操（みさお）先生と加山又造（またぞう）先生が講評に加わると「本質をとらえている」と、ほめられるようになります。人によって評価が変わることを体験した米谷さんは、自分が後輩を指導する立場になったとき、「人は自分の価値観でしか判断できない。誰かに悪いと言われても、一生懸命描いていれば認めてくれる人に出会えるかもしれない。」と励ますようになったそうです。

横山先生の奨学金でヨーロッパを訪れた米谷さんは、昔の名作に圧倒されて自分の才能に落ち込みつつも、それでも絵が好きで描きたいという自分の気持ちに気づきます。そして、「先人たちの絵はすごいけれども現代の絵ではない。ならば自分は過去でも未来でもない、生きている時代を描こう。」と自分の絵の方向性を決めます。迷いを振り切って描

いた絵は、場面の切り取り方や目をつける視点が他の人とは一味違い、新鮮で魅力あふれる絵だと話題となりました。

記事は、以上です。

このほど、米谷先生から8点の作品をご寄贈いただきました。そのうちの1つが、2号館の1階、2年2組と3組の間から体育館に向かう廊下の壁面に掛けられています。これは、1977年の「夏」という作品で、都会の公園と思われる緑が背景に、中央には一方通行や進入禁止など、いくつかの道路標識が描かれています。

この絵から、私は、「この方向に進みなさい」「こちらから入ってはいけません」という命令や禁止によって行動が制限されることへの違和感のようなものが表現されているように感じます。

皆さんはどう感じるか、興味あるところです。米谷先生の絵は、校内に設置してあります。ちょっと足を止めて、自分自身の目と感性で鑑賞してみてください。

「人によって評価は変わる。」

「一生懸命描いていれば、認めてくれる人に出会える。」

「人とは違っても、自分らしい絵を描くのだ。」

数十年前に描かれた作品の一つ一つに込められた、米谷先生の思いを感じてもらえればと思います。

2つめの話に移ります。

この1年、皆さんには、嬉しかったこと、苦しかったこと、頑張って乗り越えた大変だったことなど、いろいろなことがあったと思います。

私にとっても、嬉しい瞬間がたくさんありました。そのほとんどは、生徒の皆さんが、誠実に、前向きに取り組んでくれている様子を確認できたときに感じた喜びに満ちたものでした。皆さんのおかげで、教員ならではの幸せを感じさせてもらえる場面が本当にたくさんありました。

その中で、私の印象に強く残っている瞬間について紹介します。

11月中旬、1週間の間、本校はドイツからの高校生を4人受け入れました。4人には、基本的にはホストファミリーの生徒がいるクラスで過ごしてもらい、授業や部活動、休み時間等にいろいろな経験と交流を通して、高志高校の生活を楽しんでもらいました。交流最後の日、バスに乗るドイツの生徒たちは、別れを惜しみ、目に涙をいっぱいためていました。中には、嗚咽する人もいました。

これだけでも、交流事業の成功を確信した私は喜びで胸がいっぱいになっていたのです

が、心を大きく動かされたのはその後でした。ドイツの生徒たちを乗せたバスが校門を出ていった後、見送りに来ていた生徒の一人が、ホストファミリーをしてくれた生徒に向かって「本当にありがとう。あなたがホストファミリーをしてくれたおかげで、私たちも素敵な経験ができたよ。」と言うのです。今回の交流事業でプラスの影響を受けたのはホストファミリーの生徒だけではなく、その周囲にいた生徒も、ドイツ人生徒との交流という新たな経験への不安や戸惑い、チャレンジや試行錯誤、失敗と成功等を通して、はじめての世界を見たり新しい自分発見をしたりと様々な経験をしたのだろう、その結果得られた感動や感激が「ありがとう」の言葉に詰まっているのだろうと感じて、ますます胸が熱くなりました。

今回のドイツ交流を通して、ホストファミリーをした／しないに関係なく、「いろいろなことにトライした」「失敗も含めて成長するための経験をした」という風に自分の取組を振り返ることができた人は、次に国際交流や海外研修・留学などのチャンスが来たときに、他の人よりも素早くチャレンジすることを決断し、アクションを起こすことができると思います。そして、それが次の更なる成長へとつながるものと期待しています。

ここまで、ドイツ生徒受入れを例に挙げて話をしましたが、生徒の皆さんには、様々なことにおいて、少し勇気を出して、自分の可能性を信じて、自己の成長につながるチャレンジをしてもらいたい。特に、自分が興味や関心を持っていることについては、ぜひそのような行動を起こしてほしいと思います。

新しいことをすることには、誰でも不安を感じます。何かをやろうとすると、結果が気になります。だからといって、成功を収めることのみが目的化すると、いつの間にか、高いレベルのチャレンジを避けるようになりたりチャレンジすることそのものから自分を遠ざけるようになりたりします。しかし、それは、非常にもったいないことだと思いませんか。

大目標は、あくまでも、自分のやりたいこと、なりたい自分の実現に近づくこと、と考えてください。結果が成功であるか否かよりは、むしろ、やりたい・なりたいというパッション、実際にやってみるアクション、そして試行錯誤のプロセスに意味があるのだと考えてもらうとよいのではないのでしょうか。

チャレンジする人には、適正な自己評価と次のステージに進むためのチャンスが訪れます。一方、チャレンジを避ける人には、停滞あるいは後退が訪れるのは必然の流れです。高志高校の皆さんには、前者であってほしい。未来社会のリーダーとなる皆さんには、たくさんチャレンジを経験してほしい、と願っています。

明日から冬季休業が始まります。今年1年間の振り返りをするとともに、新しい年の決意と計画を立てる時期として有意義に過ごしてください。

皆さんの更なる成長と発展を期待して、私のあいさつを終わります。